認知症と家族のカタチ

もし認知症になってしまったら、今までのように自分らしく暮らすことはできないのでしょうか。
また、その家族の生活はどのように変化するのでしょうか。
認知症を患う齊藤光江さん100歳(新野南)と一緒に暮らす長男夫婦、勝美さん、和江さんに話を聞きました。

▼笑顔あふれる、光江さんお気に入りの1枚

突然の宣告 徐々に進行する症状

勝美さんと和江さんが最初に光江さんの行動に違和感を覚えたのは5年前。光江さんが95歳の時でした。

「ある日突然、孫やひ孫にお年玉をあげないといけないと言ったのです。

『認知症が始まっているかもしれません―』。骨粗しょう症で通っていた病院で相談した結果、医師にそう告げられました。

歳も歳だったので、覚悟はしていましたが、ついに始まったかという感じでしたね。義母は早くに夫を戦争でなくし、幼い子どもを女手一つで育ててきました。そんな苦労をしてきた人を大事にしたいと、心から思いました」と、和江さんは家族写真を見つめます。

発症後は季節感がおかしくなり、通帳やお金を取られたと言い出すようになりました。そしてその3年後には、勝手に外に出て行ってしまうなど、症状は一層進行していきました。

「何度も同じことを話すので言い返したくなることもあります。深夜に読み物や書き物をしたいと言い出すこともあるんですよ」と現在の状況を話す勝美さん。

そんなことがあった次の日には、「昨日はよく眠れなかったね」と家族みんなで顔を見合わせるのだそうです。

介護生活を振り返るお二人ですが、光江さんの話をするときはとてもにこやか。何か困った出来事があっても、次の日には笑い話になるといいます。

「介護1年生」周囲に打ち明け勉強

お二人は、光江さんが認知症だと分かるとすぐ、「介護1年生だ。みんなに聞いて勉強をしていこう」と、周囲に打ち明けることを決めました。気になったことがあると質問をして、周囲からはたくさんアドバイスをもらうことができました。

「年齢が若かったとしても、同じように周囲に話していたと思います。だって、ずっと付き合っていくものでしょ」。

和江さんは、周囲に打ち明けたことで、地域が一緒に光江さんを見守ってくれるようになったと言います。

「母が出歩いていると近所の人が電話をくれ、迎えに行くまで一緒にいてくれます。家の前の通学路を通る小学生も声をかけてくれるんですよ。みんな顔を覚えてくれていて、とても心強いです」。

家族みんなが生き生きと暮らす

光江さんは、昼間はデイサービスを利用しています。昔から多趣味な光江さんは、そこで書道や塗り絵などを楽しんでいます。自宅のリビングの壁の一画には、光江さんの力作がずらり。

「デイサービスに行くとテンションが上がり、帰宅してからも外に出たがることがあります。認知症になっても自分の意志をきちんと持っているんですね。やりたいことをやらせてあげた方が、絶対に本人のためになると感じています」と勝美さん。また、デイサービスを利用したことで家族の生活バランスもとれ、それぞれの仕事や趣味の時間も持つことができているとお二人は言います。

大変な出来事を笑って振り返ることができるのは、周囲の協力や介護サービスを利用し、勝美さんと和江さん自身も自分らしく生活できているからに他なりません。今日も光江さんはデイサービスに通い、地域の温かな目にも見守られ、趣味や友人との交流を楽しんで生き生きと過ごしています―。

▼光江さんの100歳をお祝い
左2番目から光江さん、勝美さん、和江さん